

好ましい人間関係を育む学級づくりに関する研究 ～「学級づくりガイドブック」の再編集を通して～

千葉県総合教育センター
カリキュラム開発部研究開発担当
研究指導主事 米塚 丈泰

1 主題設定の理由

平成 25 年 3 月に発行された「学級づくりガイドブック」には、学級担任としての基本的な姿勢や考え方が示されている。新規採用者や教職経験 1～6 年目を対象とした研修の参考資料及び講話・演習内容の根拠として数多く活用されている。

一方近年、児童生徒を取り巻く環境は目まぐるしく変化しており、学校が抱える教育課題も、いじめや不登校児童生徒数の増加、様々な背景を持つ児童生徒への対応など多様化している。中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）では「小・中・高等学校を通じた学級・ホームルーム経営の充実を図り、子供の学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものとしていくことが重要である」と示され、学級の在り方が今一度捉え直されている。

また、第 3 期千葉県教育振興基本計画「次世代へ光輝く『教育立県ちば』プラン」（令和 2 年 2 月策定）においても、よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実について以下のように示されている。

基本目標 1 ちばの教育の力で、志を持ち、未来を切り拓く、ちばの子供を育てる

施策 1 人生を主体的に切り拓くための学びの確立

(1) 子供の学習意欲を高め学力向上を図る取組の推進

○ よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組
の充実（関連 施策 5（2））

基本目標 2 ちばの教育の力で、「自信」と「安心」を育む学校をつくる

施策 5 人間形成の場としての活力ある学校づくり

(2) 豊かな学びを支える学校・学習環境づくり

○ よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組
の充実（関連 施策 1（1））

学級は個が育ち、よりよい集団になることを目指すものである。その根底にあるのは、教師と児童生徒の信頼関係を基にした、児童生徒同士の人間関係であると考えられる。よりよい人間関係を築いていくことは、学級づくりに留まることなく、児童生徒が生涯にわたって様々な環境で育んでいくものである。多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えていく力が求められている今、学級づくりにおける人間関係づくりの重要性はますます大きくなっている。

これらのことを踏まえ、本研究では「学級づくりガイドブック」に述べられている内容を軸に、好ましい人間関係を育む学級づくりの方向性を明らかにしていく。ガイドブックを再編集し県内に広く周知していくことで、学級づくり、人間関係づくりの一助になればと考え、本研究主題を設定した。

2 研究の目的

「学級づくりガイドブック（平成 25 年 3 月発行）」の再編集を通して、好ましい人間関係を育む学級づくりの方向性を明らかにする。

3 研究計画

令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
○基礎研究（実態調査、文献調査、全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙結果分析） ○研究計画立案 ○内容検討	○実践校の選定 ○研究会議（有識者より助言） ○学級づくり、人間関係づくりについての基礎研究（研究会議）及び実践事例収集 ○ガイドブックの作成（暫定版 Web アップ）	○有用性についての検証 ○ガイドブックの作成（完成版 Web アップ） ○リーフレットの作成 ○研修コンテンツの作成

4 研究概要

(1) 基礎研究

- ・学級づくり、好ましい人間関係づくりのための手立てについて

(2) 研究会議

令和 4 年 5 月 13 日（金）

講師 千葉大学教育学部附属教員養成開発センター センター長 土田 雄一 氏

(3) 実践的研究

- ・県内の学級経営に優れた取組、実践事例の収集

実践事例収集にあたり、以下の 3 校及び 10 名の先生方（敬称略）に御協力いただいた。なお、選定については各教育事務所より推薦を受けて決定した。

教育事務所	学校名	氏名
葛南	浦安市立入船中学校	
	浦安市立入船小学校	
東葛飾	野田市立第二中学校	
	柏市立柏中学校	村政 雄輝
	柏市立光ケ丘小学校	今門 あかり
	我孫子市立根戸小学校	杉本 一生
北総	佐倉市立内郷小学校	石塚 良哉
	神崎町立神崎小学校	森 智子
	銚子市立本城小学校	臼倉 恭子
東上総	東金市立東小学校	巖谷 侑希
	横芝光町立横芝小学校	北田 知也
	白子町立南白亀小学校	田邊 ひとみ
南房総	木更津市立西清小学校	川名 祥啓

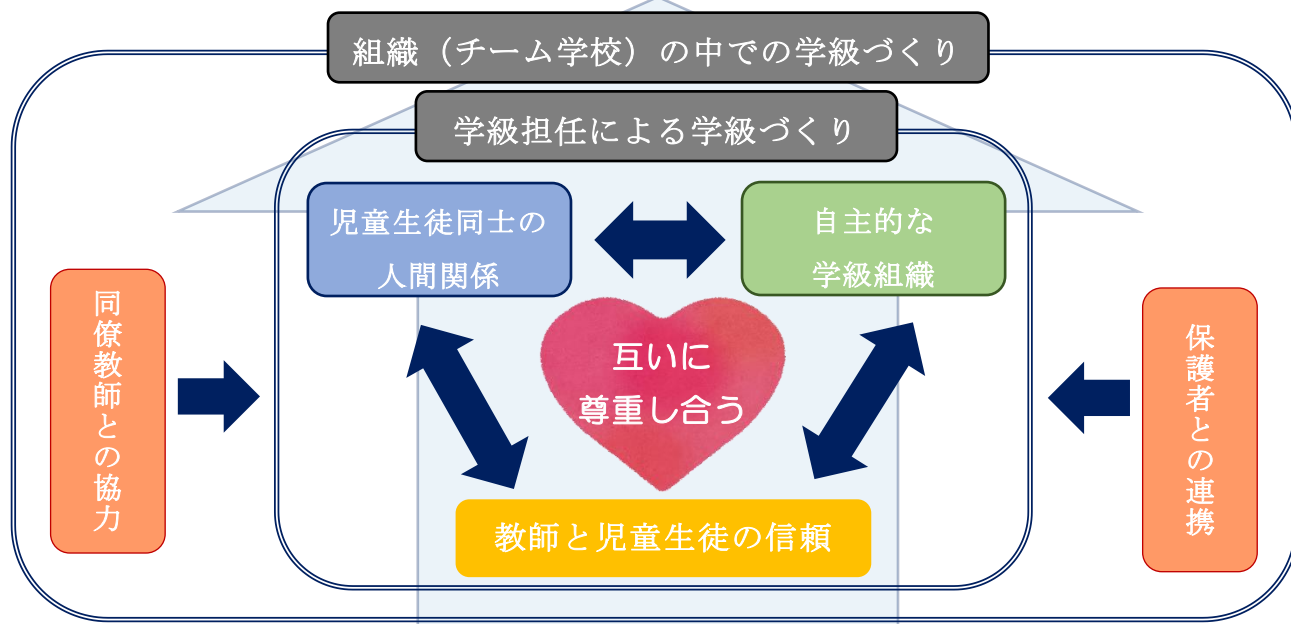
5 研究の経緯（令和3年度）

○ 学習指導要領解説総則編、特別活動編

- ・学習や生活の基盤として教師と児童（生徒）との信頼関係及び児童（生徒）相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級（ホームルーム）経営の充実を図る
- ・学級活動における児童（生徒）の自発的、自治的な活動を中心として、個々の児童（生徒）についての理解を深め、教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図る

○ 第3期千葉県教育振興基本計画

よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実



【好ましい人間関係を育む学級】

教師と児童生徒との**信頼関係**を基盤とし、児童生徒同士が**互いに尊重**し合い、自分たちで**考えて行動**できる学級

○ 令和3年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙結果（千葉県）

本県小学校及び中学校において全国平均より0.3ポイントから3ポイント低くなっている項目

番号	質問事項	小学校	中学校
6	自分には、よいところがあると思いますか	-2.5	-2.6
10	人が困っているときは、進んで助けていますか	-0.9	-0.3
16	友達と協力するのは楽しいと思いますか	-1.3	-3
40	あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか	-0.5	-0.2
41	学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか	-0.5	-0.2

○ 学級づくりに関するアンケート調査結果（教員経験1年目から10年目の教員4,658名）

【大切にしていること】

- ・児童生徒の声に耳を傾け、信頼関係を築く。
- ・互いに認め合える雰囲気をつくる。
- ・自分たちで考えて行動できるようにする。

【困っていること】

- ・児童生徒理解の仕方がわからない。
- ・けんか、人間関係のトラブルが絶えない。
- ・言われたこと、指示されたことはできるけど…

6 研究の内容

(1) 基礎研究

ア 生徒指導提要（令和4年12月）における学級・ホームルームづくりの充実

生徒指導提要には、学級づくりについて「学級・ホームルーム集団としての質の高まりを目指したり、教員と児童生徒、児童生徒相互のよりよい人間関係を構築しようとしたりすることが中心的な内容と言える」とあり、教師と児童生徒との信頼関係及び児童生徒相互のよりよい人間関係を構築することの重要性が示されている。また、「学級・ホームルーム経営では、児童生徒自身が学級や学校生活、人間関係をよりよいものにするために、皆で話し合い、皆で決めて、皆で協力して実践することを通じて、学級・ホームルームの友達のよいところに気付いたり、良好な人間関係を築いたり、学級・ホームルームの雰囲気がよくなったりすることを実感すること」とある。

学級・ホームルームは学校生活を送る児童生徒にとって、学習や生活などの基盤となるものである。学校生活の多くの時間を学級・ホームルームで過ごす児童生徒にとって、教師との関係、児童生徒同士の関係は、学校生活そのものに大きな影響を与えることとなる。そのため、前述した自発的、自治的な活動を通して、学級・ホームルーム経営の充実を図っていくことで、児童生徒同士がお互いを尊重し合い自ら考え行動できる集団にしていくことが大切である。

イ 好ましい人間関係を育む学級づくりの在り方

好ましい人間関係とは「お互いに尊重し合うことを基本とした人間関係」であると考え。「尊重し合う」とは、自分との違いを認めた上で相手を受け入れ、そして理解する、つまり自分と違った考えをもっている相手でも、人として相手を受け入れるということである。これは、教師と児童生徒、児童生徒同士の両方にいえる。このことにより、児童生徒は安心して自分を素直に表現することができるようになり、ありのままの自分を肯定的にとらえる自己肯定感や、他者のために役立った、認められたという自己有用感を育むことができるようになる。本研究においては、「教師と児童生徒との信頼関係」、「児童生徒同士の人間関係」、「自主的な学級組織」の三つを柱とし、互いに尊重し合う好ましい人間関係を育む具体的な取組について明確にしていく。

(2) 研究会議（令和4年5月13日開催）より

学校生活において、児童生徒は教師集団の関わりをよく見ている。そのため、教師と児童生徒との信頼関係を築いていく上で、教師集団の関係性も非常に重要となる。また、教師と児童生徒の関係が良好であれば、保護者との関係も築きやすい傾向にある。児童生徒同士の人間関係を構築する際には、他者との違いを前提として相手を尊重する「リスペクトアザーズ」の考え方が大切となる。さらに、自主的な学級組織づくりにおいては、教師が安全面に配慮し全体を掌握しつつ、自由裁量度があることが非常に重要となる。そうすることで、児童生徒は、自発的、自治的な活動を通して、他者への感謝の気持ちをもつとともに、自信と満足感を得て自己有用感の向上にもつながっていく。

(3) 実践的研究

ア 学級開き

生徒指導提要には「学級づくりは、教師と児童生徒、児童生徒同士の選択できない出会いから始まる」とある。このような集団を、互いに尊重し、認め合い、励まし合える集団にしていく必要がある。そのため、基本的に1年勝負となる学級づくりにおいて、学級集団としてのスタートを切る「学級開き」は非常に重要となる。学級の目指すべき姿を明確にしてゴールを示すことや、学級のルールを確認することで、学級としての素地を築くことが大切となる。

(ア) 学級目標の設定

【実践例1 自分事として捉えさせる】



学級目標を設定する際、教師が一方的に決めるのではなく、学級全体で話し合って決めることで、児童生徒が自分事として捉え目標に対する意識が高まる。また、思考ツール等の手法を活用して、思考を可視化、分類・構造化することで多面的・多角的に考えることができる。

(イ) 教育観を伝える

【実践例2 情報を視覚化する】

教師が教育観をもつことで、指導における判断基準が明確になる。そのため、ぶれずに一貫した指導をすることができる。さらに、児童生徒に伝え共有することで、児童生徒にも反映されるようになる。学級のルール等を確認する際には、道徳科等と関連させることで、より効果的に規範意識を高めることができる。



イ 教師と児童生徒の信頼関係を育む実践例

(ア) 児童生徒理解

学習指導要領「総則編」には「学級（ホームルーム）経営を行う上で、最も重要なことは学級の児童（生徒）一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな児童生徒理解である」と示されている。

信頼関係の第一歩は、相手のことを理解し、受け入れ寄り添っていくこと

である。そのために授業中はもちろん、日常の学校生活において、児童生徒と積極的にかかわることが必要になる。様々な方法、場面で児童生徒をよく見ること、学習状況や身体的な能力、一人一人の興味関心、友人関係、性格的な特徴等を理解することができる。

【実践例3 ICT (Forms) を活用した学級アンケート】

学級アンケートを活用することで、直接言えない悩みを相談するといったケースがある。その際に、ICT を活用することで集計等の手間が省け、効果的に取りまとめることができる。また、一度作成すれば、定期的にくり返し実施することもできる。

学級アンケート

このアンケートは、先生以外が見ることはありません。困っていること、悩んでいることがあったら、正直に書いてください。

1 学級の友達は、あなたに優しくしてくれますか。

☐ 大変そう思う

☐ 概ねそう思う

☐ あまりそう思わない

☐ 全くそう思わない

【実践例4 多角的に情報を収集する】

カードを使い、保護者から児童生徒の情報を得る方法がある。特に、年度始め等の人間関係が構築されていないときには、このような情報が児童生徒とかかわるきっかけになる。また、保護者の立場から、児童生徒の様子や思いを知ることは非常に効果的で、深い児童生徒理解へとつながる。

おしえてくださいカード

1 お子様に関すること（趣味、好きな食べ物、なかのよい友達など）

2 家庭でのお子様の様子

3 お子様成長したなと感じること

4 お子様にがんばってほしいと思うこと

5 健康面で留意すること（持病、アレルギー、配慮事項など）

年 組 名前

【実践例5 正対する】

しっかりと児童生徒と向き合うことが大切である。その際に「子供」としてではなく、一人の「人」として向き合うことでより深い信頼関係を築くことができる。さらに、児童生徒の話を聞く際には、相手を受容し、共感的な雰囲気をもって話を聞き、安心感を与えることが大切である。



(イ) 教師の言葉かけ

学校生活において認めたり励ましたりする等、教師が児童生徒に言葉をかける場面は数多くある。その際、言葉遣いに気を付けることはもちろんであるが、伝え方を工夫することで相手が受け入れやすい場合がある。

【実践例6 Iメッセージ～伝え方の工夫～】

「私（I）」を主語にして、「相手の行動」「その影響」「自分の気持ち」で構成されている話し方である。「私」を主語にしているため、相手に配慮しながら、自分の主張を伝えることができる。そのため、相手にとっても受け入れやすく信頼関係が成立しやすい。

【相手の行動】	みなさんが考えて行動してくれると
【その影響】	時間を効果的に使うことができ
【自分の気持ち】	私はうれしいです

(ウ) 特別な配慮や支援を要する児童生徒への対応

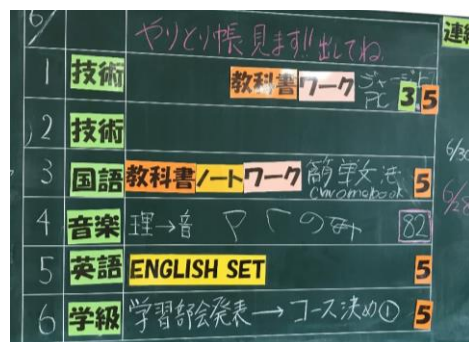
昨今、児童生徒をとりまく環境は大きく変化している。例として、いじめや不登校、特別な配慮や支援を要する児童生徒、性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒への対応などが求められる。社会の急激な変化とともに、児童生徒の発達上の多様性や家庭環境複雑化等、個々のニーズに応じたきめ細かな対応が大切になる。

【実践例 7 外国にルーツを持つ児童生徒への対応】

日本の生活に合わせるのではなく、違いに気付かせ、少しずつ日本の文化に慣れさせていくことが大切である。特に、言語の違いから意思疎通が図れない児童生徒においては、翻訳機（ポケトーク）や翻訳ツール等を活用することで、安心感が生まれ信頼関係を深めることができる。

【実践例 8 特別な支援を要する児童生徒への対応】

連絡事項や一日の流れを教室黒板やホワイトボードに残しておく方法がある。口頭で指示する場合もあるが、重要なのは連絡事項を教室に一日残しておくことである。話を聞くことが苦手、多くの情報を覚えきれない児童生徒にとっても再度確認することができる。



ウ 児童生徒同士の人間関係を育む実践例

(ア) 授業における人間関係づくり

学校生活において、全ての児童生徒が最も長い時間一緒にいるのが授業である。授業を通して教師が意図的に、互いに認め合い協力し合うことの大切さを感じさせることが、共感的な人間関係を育てることにつながる。

【実践例 9 ICT を活用した協働的な学び】



作成したプレゼン資料をもとに行ってみたい国についてペアで交流したり、自分が住んでいる市について調べたことをもとに、他校の児童と交流したりしている場面である。探究的な課題設定の授業において、情報の収集や整理・分析、クラウドを活用した情報共有等の場面で ICT を活用す

ることは非常に効果的である。ねらいを達成するための学習過程の中で、意図的に児童生徒がかかわり合い、学び合う場面をつくることができる。

(イ) 安心して意見を言える雰囲気づくり

集団内の児童生徒同士の良好な人間関係を築くことは、感情交流や内面的なかかわりを含んだ交流が重要である。そのために、教師が意図的に内面的・感情的に深く関わるような働きかけをしていくが必要になる。

【実践例 10 クラス会議による話し合い】

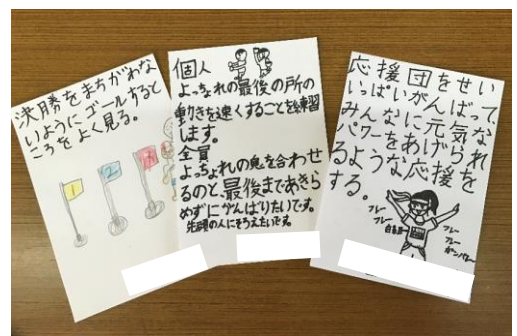
クラス会議とは、児童生徒で学級の課題について、解決策を考え話し合っていくものである。短時間で継続的に実施していくことで、児童生徒の安心感を高めるとともに、学級への所属感、仲間への信頼感、課題解決への貢献感といった共同体感覚を育むことができる。



(ウ) 行事を活用して人間関係をつなぐ

仲間と協力してつくり上げた行事は、達成感や成就感を生むと同時に、学級という組織の信頼関係をさらに強固なものにする。そのため、ただ行事をこなすのではなく、行事を通して児童生徒たちにつけたい力を明確にし、主体的に取り組むことができるよう支援していく必要がある。

【実践例 11 行事に向けた話し合い】



行事は、児童生徒一人一人を成長させるとともに、児童生徒同士の人間関係をつなぎ、学級を一つにまとめるチャンスでもある。学級全体で話し合い、一つの目標に向かって協力したり、時には葛藤し、相手を尊重し折り合いを付けたりすることを通して一体感を育むことができる。

また、児童生徒の発達段階に応じて、一人一人ができることを考えたり、学級集団としての目標を設定したりすることで、自己有用感を育むことにもつながる。

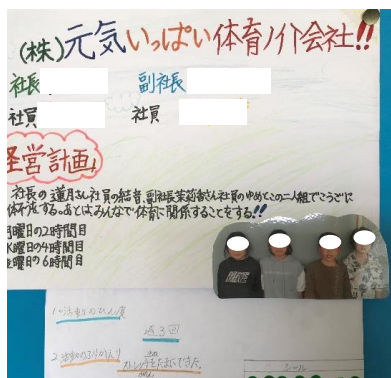
エ 自主的な学級組織に向けた実践例

(ア) 係活動の充実

児童生徒の主体性を伸ばし、責任感をもたせていくために係活動は大切

な取組である。児童生徒が自ら考え、計画、実践したことが他者のためになり、学級を豊かにしていく。係活動を通して他者に役立つ喜びを感じ自己有用感を育むことにもつながる。

【実践例 12 主体的に考えて取り組む係活動】



活動内容、活動計画を立案することで計画的、主体的な活動になる

自ら選択し自己決定した活動であるため責任をもって取り組む

係活動は、教師から児童生徒に一方的に与えるのではなく、児童生徒一人一人が学級に必要な係活動を考え、取り組んでいくことが大切である。

一つの例として、係活動を「〇〇会社」とし会社形式で活動する方法がある。会社は、社長と副社長（2名以上の構成員）と活動内容と期間が決まっていれば、申請をして設立することができる。会社を設立したら、求人募集を出す。他の児童生徒は、求人募集の活動内容を見ながら、興味・関心がある会社に入社する。教師から与えられたものではなく、児童生徒が自ら考えた活動であるため、主体性を尊重しながら継続して取り組むことができる活動になる。

(イ) 自発的、自治的な活動

「自発的、自治的な活動」とは、児童生徒が自ら課題を見出し、その解決方法や実施について合意形成を図り、互いに協力しながら目的を達成していくものである。児童生徒の意見や考え、活動を尊重していくことはもちろんであるが、教師がしっかりと関わり、適切に支援をしていく必要がある。総合的な学習の時間（探究の時間）や特別活動、行事等を活用し、横断的に取り組むことでより効果的な活動になる。

【実践例 13 自発的、自治的な活動に向けた話し合い】



自分の意見はもちろん、友達のよいところを意識しながら、ペアや班、全体での話し合いを通して合意形成を図っていく。その際に、一概に多数決で物事を決定するのではなく、児童生徒自身が折り合いをつけながら物事を決定していくことが大切になる。互いに協力し合いながら他者を理解することで、自発的、自治的な取組につながっていくよう配慮する。

【実践例 14 自発的、自治的な活動】



総合的な学習の時間における特別
養護老人ホームの方々との交流



特別活動における自分たちで計画
した「1年生とたのしむ会」

一人一人に役割があり、何をすべきか理解してこそ、すべての児童生徒が輝くことができる。そのためには、教師の綿密な計画とサポートが重要になる。準備過程において、児童生徒に丸投げするのではなく、教師が適宜助言・修正することが大切である。さらに、活動に対する評価、振り返りを行うことで、自己有用感を育むことにつながる。

7 成果と次年度に向けて

(1) 成果

- ・実践校の協力を得て、授業及び学校生活の様子を参観したことで、学級づくりにおける優れた実践事例を収集することができた。
- ・平成 25 年 3 月に発行された「学級づくりガイドブック」の改訂に向けて、ICT を活用した活動等、新たな視点を得ることができた。

(2) 次年度に向けて

- ・実践校の実践等から、学級づくりについてさらに多角的に研究を進め、深く検証をしていく必要がある。
- ・ガイドブックの内容が、学校現場に寄与するものになっているか、その有用性について検証していく。
- ・完成版を Web アップするにあたり、実践事例を詳細に分析していくとともに、継続研究に向けた計画を立案していく。